

2007
冬号

No. 2

2007年12月12日

こわち自治研

発行

高知県自治研究センター
780-0862
高知県高知市鷹匠町2-5-47
TEL (088) 824-0151
FAX (088) 820-0062

編集者 折田 晃

研究報告

高齢者が行うコミュニティビジネス

“福祉産業から産業福祉への発想の転換”

高知県自治研究センターでは、全国トップをいく少子高齢化の高知県のこれからの地域づくりをどのように進めるべきか？、その中で高齢者が生きがいを持ち、少しでも元気になることができないのか？、という問題意識か

らコミュニティビジネスの研究に取り組んでいます。そして現在は「直販所を活用した農産物の集出荷システム構築」の実証実験を行っており、現段階のまとめとして黒潮町・友永研究員より報告をいただきました。



こじやんと号と田辺夫妻

高齢者も地域で元気に海がらせるために

■そもそも

研究テーマの確認

自分で作った作物の出荷はしたいが車に乗れないなどの理由により、出荷をあらかじめしている方たちのお手伝いをする中で、生きがいを見出してもらい、健康で元気のある人と地域を維持・継続するというのがこ

■パッチワークでオリジナル手探りの準備作業

今回の実証実験の稼働に向け、いろいろと事務処理がありました。集出荷作業

の説明会・集荷日程の調整・集荷者との契約・集荷カレンダーの作成と配布・集荷場所の選定など。

視察に行った上勝町や赤岡青果市場のシステムの要

■「こじやんと号」誕生

なんとか準備完了

事務処理も大詰めに近づいたところ、業務内容がいまいであるため、少し整理が必要であることに気づきました。業務の位置づけは、各地で話題になった「移送サービス」で議論された内容（違法行為など）を参考に、業務内容を検討しました。

・グレーなラインは踏まない（関係者すべてに被害を与える）

・この業務は実費程度の金を与える

・田辺さんが出荷の関係で「屋号」を取得している田舎なので、最も危険な「風評被害」を未然に防ぐことの必要性（田辺さんは、運送屋でもないのに

二面につづく

また、このことにより医療や介護に要する費用を抑制することができるのではないかとという仮説が、実証実験のポイントになります。

素を組み込み、ツギハギだらけのオリジナルシステムが誕生し、いつしか「とりあえずやってみるとわからんもんね」が、合言葉になりつつありました。どっかで聞いた「走りながら考える」というフレーズよりも、「思考停止」に近い雰囲気も否めませんが……。

ともあれ、少し怪しい要素を残したまま、何とか稼働できる準備は整ったのでした。

（三）稼働までの主な行動記録参照

（二面からつづく）
 お金もらって運んでいるらしい……など
 これらをふまえ、運送業の許可を取得することに決定。聞けば届出だけではないと言ふ。近年の規制緩和の恩恵をこんな形で受けることは……

数日のうちに「黒ナンバ」を取得し、作業に使う軽トラに装着。先の屋号から「こじやんと号」と呼ぶことにしました。

ようやく準備の整った、稼働初日の前夜にお邪魔すると、少し楽しそうな顔が

見られ、やたらとうれしそうにささげていた。気持ちにさせていただきした。

フタを開けると ほぼ想定通りの滑り出し

田辺さんに聞き取った初日の状況（湊川・小川地区）の概要は以下のとおりです。「初日の出荷者は総数で六人。作物が少ないこの時期なら、まあこんなものかといったところ。でも、やはり少ないというのが実感。また、出荷自体が初めてで、商品にバーコードを貼ることがわからない方がいたので、集荷途中で手伝ったりというハプニングもあったが、ほぼ想定した範囲で順

調に進んだ」とのこと。また、初めてであることと、体調を崩したり、急用ができたときに即対応がでるように、当面は夫妻で集荷作業をすることにしたいとのこと。結果的に現在も

荷物の上げ下ろしを夫、荷物の預かり伝票の記載を田辺さんが行うという二人三脚体制を採用（この方が効率的で時間も短縮できる）しています。

荷物の上げ下ろしを夫、荷物の預かり伝票の記載を田辺さんが行うという二人三脚体制を採用（この方が効率的で時間も短縮できる）しています。

現場の想い 利用してくれたらいいのに

一〇月一七日現在の作業状況を聞いてみたところ、特に大幅な動きはありませんでした。出荷者は五〜六人で推移、継続して出荷する人、時々出荷する人などでこの人数で横ばい状態。理由としては、作物があまり収穫されない時期である

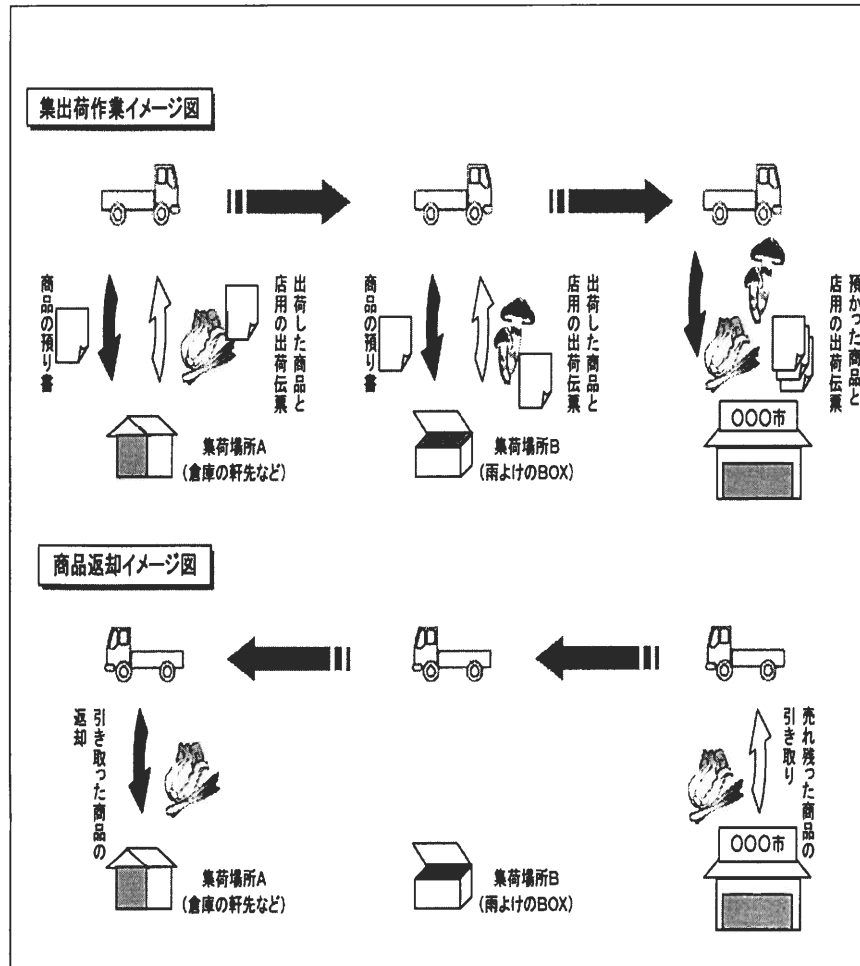
ることや、人により作っているものが違うので、出荷

寒い・眠い・暗い、でも… 集荷者の思いを理解

先行して稼働開始している田辺さんの地元である湊川・小川地区に加え、地理的に不案内な馬荷・御坊畑地区の稼働開始の機会に、研究員も作業に同行することとしました。

五時半には、出発する必要があるので、前日から田辺さん宅でヒアリングを兼ねた前夜祭的ミーティング。

この地区の初日は、九箇所の集荷場所中三箇所まで念入りに確認して納得さす有様。結局この地区の初日は、九箇所の集荷場所中三箇所まで念入りに確認して納得さす有様。結局この地区の初日は、九箇所の集荷場所中三箇所まで念入りに確認して納得さす有様。結局この地区の初日は、九箇所の集荷場所中三箇所まで念入りに確認して納得さす有様。



● 各地区の集荷初日の出荷状況

| 地区名 | 出荷登録者 | 初日の出荷者 | 日付 | 初日の出荷物 |
|-----|-------|--------|-------|-----------------------------|
| 湊川 | 11人 | 4人 | 10月2日 | ゴーヤ、酢みかん、サトイモ、ニンニク、ドーナツ、ササゲ |
| 小川 | 7人 | 2人 | 10月2日 | 梨、ニンニク |
| 馬荷 | 18人 | 4人 | 11月3日 | 小豆、柿、南瓜、レモン、菜花、茹でたタケノコ |
| 御坊畑 | 1人 | 1人 | 11月3日 | 柿、柑橘類加工品 |
| 合計 | 37人 | 11人 | | |

逆には、「ないね」と、所定の場所の隅々まで念入りに確認して納得さす有様。結局この地区の初日は、九箇所の集荷場所中三箇所まで念入りに確認して納得さす有様。結局この地区の初日は、九箇所の集荷場所中三箇所まで念入りに確認して納得さす有様。

場所待っていてくれました。この作業に同行して、実感したのは、「出荷していただけることへの喜び」です。顔は見えませんが、出荷者と集荷者のコミュニケーションがそこに発生しているのです。間違っても「荷物が

少なくても今日は楽だった」ということはないこと、利用されること・そこに品物があることが何よりの励みであることが実感できました。そして「もっと気軽に利用してあげたいの」という田辺さんの言葉の真意を理解したのでした。

ることへの抵抗感(商売の美学(奥ゆかし)の思考)に由来する「気持ちの問題」が大きなウェイトを占めているように感じます。しかし、利用して初めてそのよさが実感できるのがこの仕組みですし、利用されてこそ集荷者が労われる作業内容です。

■よりよいものに

少し見えた課題

集荷する側と出荷する側には以下の「ズレ」があり、利用者の増加につなげていない原因のようです。

【相反する意図・想い】
これらの相反する想いの背景には、田舎の人独特の「自分が作ったものを売

る」ことへの抵抗感(商売の美学(奥ゆかし)の思考)に由来する「気持ちの問題」が大きなウェイトを占めているように感じます。しかし、利用して初めてそのよさが実感できるのがこの仕組みですし、利用されてこそ集荷者が労われる作業内容です。

【相反する意図・想い】
これらの相反する想いの背景には、田舎の人独特の「自分が作ったものを売

【相反する意図・想い】

| 集荷者側の意図・想い | 出荷者の想い (一部予想) |
|---|-----------------------------------|
| これまでは自家消費したり、人にあげていたものなど、どんなものでも出品している(そのことで、楽しみを見出してほしい) | こんなもの売っていいの? そんなもの売ったのか? と人に言われそう |
| 意外なものが売れるから、どんどん出して | こんなもの売れるはずがない |
| せっかくシステムを作って集荷しているのだから、少しでもいいので気軽に利用してほしい | 人に運んでもらってまで売りに出すほどの品物でもないし、品数も少ない |

● 稼働までの主な行動記録

| 日付 | 内容 | 特記事項 |
|---------|---|------------------------------|
| 8/17-18 | 赤岡青果市場視察 | |
| 9/8 | 集出荷システムの説明会: 湊川・小川・馬荷 高知大生アンケート実施 | |
| 随時 | 契約書作成・輸送業務に関する協議及び事務処理 集荷作業に必要となる物品の購入 (伝票類・出荷用BOX等) | 営業許可が必要であったかは別のテーマとして検討要 |
| 10/2 | 湊川・小川地区集出荷開始 夜間電話で作業状況をヒアリング | 実際の集出荷手順については、集荷者の田辺さんが個別に説明 |
| 10/17 | その後の状況のヒアリング (電話にて) | |
| 10/30 | 馬荷・御坊畑地区対象の集出荷手順の説明会 | 田辺さんに同行願い、集会所で一括説明 |
| 11/3 | 馬荷・御坊畑地区集出荷開始 研究員と高知大生が集出荷作業に同行 | |
| 12/1-2 | 出荷者に対するヒアリング | |

このように、何とか船出した実証実験ですが、これはあくまでもスタート。今後は集荷者の状況把握だけでなく、出荷者と出荷物の状況などの客観的で多角的な分析、この仕組みを地域で維持することが可能であるかの検証、維持する場合にクリアすべき課題の抽出・解決策の提案など、研究テーマに踏み込んだ活動に移行します。



歩道のない国道を歩いて出荷する人

「こわいねえ。一緒に荷物に乗せてあげられるといいのよ。」と、田辺さん。まちづくりの問題を、ここで改めて実感させられるとは思いませんでした。このまちの人はやさしいが、このまちは人にやさしいか? 出荷者の気持ちの相違を問う前に、問いかけられているようにです。

(文責・事務局)

■まとめ

これからの活動

研究テーマにたどり着くとすらかなわれないといつてもいいかもしれません。このため、研究員の一人

の行動として、会報(ニユースレター)を発行し、認知度のアップと利用者数の拡大に努めることとしました。

■余談

このまちは課題が

集荷作業に同行して、最後に気になった点を一つ。出荷先の市場の所在する黒潮町入野地区は国道の改良が未了で、二桁国道なのに歩道がない非常に危険な道路です。数km離れた場所から自転車荷物を運んでいる人もいるという。突風が吹かすとも、荷物でバランスを崩せば……



馬荷地区の集荷状況



出荷された柿

自治研究センター・コミュニティビジネス研究チームには、高知大学人文学部鈴木ゼミ、黒潮町職員、仁淀川町職員、自治研究センター事務局のメンバーが参加し、二〇〇六年度から試行錯誤を繰り返しながら研究を行ってきています。

この研究に、当初から関わっていた高知大学四回生の大野奏さんより、感想も含めてレポートをいただきました。



高知県自治研センターによる 集荷事業研究に参加して

高知大学人文学部 鈴木ゼミ 4 回生 大野 奏



私が、この研究に参加したのは大学3回生のときでした。「自治研究センターの方々と、コミュニティ・ビジネスを立ち上げる機会がある」という担当教授の話から、この研究に参加することになりました。「地域活性化」に関してとても興味はあったのですが、実際にその機会に携わることがなかったので、とても興味深い話でした。

黒潮町、仁淀川町、上勝町、赤岡町など、いろいろなところを見学、調査しました。自治研究センターや各役場の愉快な方々に囲まれ、気兼ねなく楽しく調査に参加できました。

研究に参加して、地域や地域を支える人と関わることで、地域の現状を見た気がします。大学の授業で地域について勉強してきましたが、地域の抱える問題の深刻さや地域の大切さを、肌で感じました。

徳島県上勝町の「いろどり」の視察を行って感じたことは、「こんなに楽しそうな老後が送れるのであれば、ゆくゆく若い世代が地元に戻ってきそうだな」ということです。地域で生きる人々が、生きがいを持って生きいきとしている姿を見た若者は、自然と地域に戻ってくるのではないかと思います。

また、今後地域を支えていく若い世代にも、このような研究に参加を呼びかけることはとても重要なことだと思います。なぜなら、このような機会に肌でいろいろなことを感じ、「自分の地域を何とかしなくては」「地域のやめに何かしたい」という思いを持つ人が増えると思うからです。

今回の集荷事業研究が、今後の地域活性化に役立つように、研究に参加していきたいと思っています。

「障害者自立支援法の抜本改正を考えるシンポジウム」を開催します

県自治研究センターとして取り組んできた「障害者自立支援法の実態調査」アンケートは、多くの皆様のご協力を得て、当事者・家族で一、五九五名、事業者で一〇八ヶ所から回答をいただきました。

このアンケート調査集約から、生活の困難さの増大や自由度の低下など、障害者自立支援法の施行による大きな問題点があらためて明らかになってきています。

このアンケート結果を広く県民の皆さんに明らかにし、当事者・家族や事業者の皆さんなどの意見を聴きながら、障害者自立支援法の抜本的な改正に向けての基本的な論点を整理していくことを目的として、シンポジウムを実施します。

日時 二〇〇八年一月一四日(月)

一三時三〇分～一六時三〇分

場所 高知女子大学

永国寺キャンパス二〇三教室

内容

第一部 問題提起

「高知県における障害者自立支援法

に関するアンケート結果報告」

田中きよむ さん

(高知女子大学社会福祉学部教授)

第二部 パネルディスカッション

「障害者自立支援法をどう変えるのか」

コーディネーター 田中きよむ さん

パネリストには、障がい当事者、家族、事業所行政それぞれの立場の方を予定しています。

多くの方々のご参加を

お待ちしております。